ネパールの未来を考えよう

学校所在府県：奈良県
学 校 名：奈良教育大学附属中学校
名　　前：吉田　寛（社会）
実践教科：総合的な学習の時間（国際理解学習）、社会（地理的分野）

指導時数：4 時間
対象学年：中学校 1 年生
対象人数：155 人（4 クラス）

1. 教師海外研修を通して感じたこと

「世界を知ることは、自分のことを知ることだ。」

この言葉は、国内での事前研修において、山中信幸先生から最初に教わった言葉である。改めてネパール帰国後にこの言葉と向き合ってみると、世界の現状をより良いものにするために、自分事として考えはじめ、そして、悩み苦しんでいる自分がいる。自分はたった 1 週間ちょっとの滞在でどこまで、何を、理解できたのだろうか。間違ったことを教室の生徒に伝えてしまわないだろうか。このような不安と心配の一方で、ネパールで見てきたこと、感じてきたことを少しでも多くの人々に伝え、知ってもらいたいという積極的な自分がいる。

私が教師海外研修を通して感じたことで最も印象的なことは、「開発途上国に対する見方」が自分の中で変化していったということである。生徒に対して「日本に生まれて良かった。」という感想で終わらせないように、これまでも実践する際には心がけてきたつもりだが、私自身がそのような感覚を持っていたのではないか、ということに気づかされた。私が出会ったネパールで暮らす人々は、決して悲しそうな目をしているわけではなく、精一杯毎日を大切に過ごし、あたたかく優しい心を持っている。そして、ネパールで活動されている日本人の方々は、他の誰よりも真剣に、そして誠実にネパールの人々のことを考え、地域の課題に対して共に汗水を流している。あたりまえのことなのに忘れがちになってしまう、「顔の見える関係性」の大切さに気づかせてくれた大きな学びの研修であった。

2. カリキュラム

（1）実践の目的・背景

本校では中学 1 年生の後期、「総合的な学習の時間」の使い方として「国際理解学習」に重きをおき、国立民族学博物館の社会見学や奈良教育大学で学んでいる海外からの留学生との交流会など、さまざまな活動に取り組んでいる。生徒の視野を広げ、異文化理解を図ることが「他者理解」につながり、最終的には「他者は、自分を見る鏡」であることに気づかせるため、多様な価値観に触れ、共感する場面の設定が必要だと考え、今回の教師海外研修での経験を国際理解学習の一環として組み込むこととした。

また、社会科の地理的分野においては、1 年生の前期に日本の諸地域、後期に世界の諸地域を学ぶカリキュラムとすることで、前述の国際理解学習とリンクしながら、南アジアの地誌としてネパールを題材に授業することが可能となった。

授業の目的としては、ネパールの人々の生活を知ることを通して、多様な文化や価値観に気づかせることと、ネパール社会が抱える課題などの背景を知った上で、ネパールの人々にとって必要な国際協力のあり方とはどのような形かを「持続可能」というキーワードから考えることとした。

（2）授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目（学年総合） 「世界がもし100人の村だったら」ワークショップ ＊世界の現状を理解し、自分との関係に気づく。	●学年生徒全員を対象に、ワークショップを実施。 ●世界には多様な言語や文化を持つ人々が住んでおり、そこには大きな貧富の格差があることを、ロールプレイによるシミュレーション（疑似体験）を通じて学び、地球規模でものごとを見る目を養う。	●DEAR（開発教育協会）制作の教材 ●パワーポイント ●役割カード ●教材プリント ●感想用紙
2 時限目（社会） 「違い」と「共通性」を知る ＊自分の中でできている「思い込み（先入観）」や「偏見」に気づく。	●ネパールのイメージを述べさせる。 ●カードゲーム「レヌカの学び」を行う。 レヌカさんというネパール人女性が日本を訪問して気づいたことを書き記したカードと、ネパールにいるときの気持ちを書き記したカードを仕分けするゲームを通して、自分の先入観を自覚するとともに、共感できる部分を知る。 ●ネパールの写真を見せながら、気づいたことを発表する。（違い・共通性）	●DEAR（開発教育協会）制作の教材 ●カード ●ワークシート ●パワーポイント
3 時限目（社会） ネパールのくらし ＊ネパールのくらしを知るとともに、抱える課題を意識化する。	●ネパールの現状を整理し、理解する。 ●パトレケット村の「レグミーさん一家のくらし」を通じて、農村のくらしを知り、20 歳のネパール人青年の夢・悩みに共感しながらも、ネパールが置かれている社会的背景を理解した上で、自分事として考える。	●写真 ●現地で撮影した動画 ●パワーポイント ●ワークシート
4 時限目（社会） ネパールの未来を考える ＊国際協力への姿勢や問題解決への姿勢を養うきっかけとする。	●どのような国際協力のあり方がベターかを「持続可能」というキーワードから考える。 ●現地での JICA の活動を紹介する。 ●危機遺産に登録されたことがある「カトマンズ盆地」について、DVD を視聴し、古い町並みを持つ奈良との共通性から、今後の未来について考える。	●ワークシート ●DVD 教材「近代化に翻弄される世界遺産 カトマンズ盆地」（約 10 分）

3. 授業の詳細

1 時限目（学年総合）：「世界がもし 100 人の村だったら」ワークショップ

ねらい…世界の現状を理解し、自分との関係に気づく。

◆内容◆

① 役割カードを配付し、世界の人口分布や男女比、言語、識字率、富のかたよりなどを体感する。
② 「世界がもし 100 人の村だったら」の文章を読む。
③ 各クラスの学級教室に戻って、振り返り用紙に感想を記入し、班で内容を交流する。

◆所感◆　学年生徒 155 人を 100 人村に見立てて体育館で実施したので、地域（州）ごとの人口分布を確認する際の移動は迫力があり、実感を伴って考えることができた。また、役割カードでその人の立場に自分の身をおくことを通して、一人ひとりがこれまで知らなかった知識を得て、世界のことを 1 つの村としてつながりを持って考え始めるようになった生徒が多くみられた。

２時限目（社会）：「違い」と「共通性」を知る

ねらい…自分の中でできている「思い込み（先入観）」や「偏見」に気づく。

◆内容◆

① ネパールのイメージを生徒に発言させる。

② 「レヌカの学び」というカードゲームを通じて、日本とネパールの違いや共通性に気づく。また、自らの先入観や偏見に気づく。

③ 教師が実際にネパールを訪問して撮影してきた写真を見ながら、気づいたことを発表する。

「レヌカの学び」カードゲームの様子

雨が降ったときの道路のようす

生徒の反応

【違い】
- ▶水はタンクにためる。
- ▶１日に数時間の停電。
- ▶雨が降れば道路は冠水。
- ▶電線が絡み合っている。
- ▶１日の食事回数が２回
- ▶道路にバイクが多い。
- ▶売店が昔の日本のようだ。（対面式の露店）

【共通性】
- ▶宗教を信じる。
- ▶スマホを持っている。
- ▶親の手伝いをする。
- ▶地震が発生しやすい。

◆所感◆　ネパールに対する生徒のイメージをたずねたところ、「ヒマラヤ山脈」「地震」といった程度しか意見が出ず、ほとんど誰もがネパールの実体を知らない中での授業スタートとなった。カードゲーム「レヌカの学び」では「食事前には必ず手を洗う」というカードが、日本かネパールかで迷う生徒が多く、「ネパール」という答えを聞いても納得できない様子だった。解説で、「ネパールは右手を用いて食事する」ということを聞いて、ようやく子ども達がすっきりした顔をするなど、ゲームを楽しみながらネパールのことを知ることができた。その後、実際に現地で撮影した写真や動画を見せると、カードゲームよりも生徒の反応が鋭くなり、積極的な発言が見受けられた。

３時限目（社会）：ネパールのくらし

ねらい…ネパールのくらしを知るとともに、抱える課題を意識化する。

◆内容◆

① ネパールの現状を整理し、理解する。（前時の気づきを、パワーポイントで整理して説明。）（ 資料１ ）

ネパールの現状

- ・インフラ（電力・水道・道路事情など）が未整備。
- ・対面販売によるコミュニケーション。
- ・スマホを持っている人が意外と多い。
- ・宗教と生活が結びついている。
- ・地震の復興は遅れ気味。
- ・政治が不安定。

ココがポイント

▶どうしても写真だけでは伝わらない部分については、生徒との問答のやりとりをしたのち、ある程度説明する必要がある事項もあった。（例えば、政情不安のことや、カースト制度など。）
▶負（マイナス）の要素だけが、突出しないように配慮する必要がある。
▶スマホを持っているところが、開発途上国のイメージと違う。（固定観念を揺るがす。）

② パトレケット村の「レグミーさん一家のくらし」について、パワーポイントの写真スライドを見ながら、ホームステイ先での出来事の文章を読んで、農村のくらしを知る。（資料２）

レグミーさん一家のくらし
・母が夜明け前に起きて家事を始める。　・子どもが水汲みのために共同の井戸に向かう。
・ヒンドゥー教と生活が結びついている。　・農業の様子と農村の現状。

③ レグミー家の長男、20 歳のネパール人青年（アチュトさん）の夢・悩みに共感しながら、ネパールが置かれている社会的背景を理解した上で、自分事として考える。

アチュトさんの夢
にほんに　ならった　ことが　ネパールに　かえって
おしえ　たい　です
ネパールに　かえって　にほんごの　せんせえに　なりたい　です

日本語の勉強をするアチュトさん

ココがポイント

▶現在、ネパールでは「外国への出かせぎ・留学」がブームになっている。ネパールには農業と観光以外に、大きな産業がなく、大学を卒業しても就職先がないという現実がある。
外国へ行こうと思うと、エージェントと呼ばれる仲介業者に対して大金を支払う必要がある。

◆所感◆　私はアチュトさんから「日本に行くなら、東京に行けば良いか、田舎に行けば良いか、どちらがいいと思うか？」という相談を受け、１クラス目はこの相談をそのまま生徒に考えさせてみた。しかし、東京と田舎の比較（どちらの方がアチュトさんにとって暮らしやすいか？）になってしまい、生徒の思考を深めることができなかった。また、生徒たちの声としてアチュトさんの留学を応援する生徒が学級の大半を占めるという結果を招いた。そこで、２クラス目からは、「外国への出かせぎ・留学は、果たしてネパールの発展につながるのだろうか？」「出かせぎに出られない人々はどうすればいいのだろうか？」と問い方を変えてみた。

４時限目（社会）：ネパールの未来を考える

ねらい…国際協力への姿勢や問題解決への姿勢を養うきっかけとする。

◆内容◆

① ネパールが抱える負の連鎖（国内は就職難で、出かせぎに向かう）はこのままで良いのだろうか？どのような国際協力のあり方がベターかを「持続可能」というキーワードから考える。（資料３）

生徒の意見

▶持続可能な世界をつくるためには、日本がサポートするのも大切だけれど、サポートしすぎるのもいけないと思う。まずは、ネパールの人が安全に暮らすことからだから、政治を安定させてあげるようなことをしないといけない。
▶日本の技術を伝え、ネパールだけでも大丈夫なようにする。（発電技術、品種改良の仕方など）
▶農業をする人が働き続けられるように支援を考える。ネパールの人たちが自分たちで豊かな生活を築けるような支援が良いと思う。そうすれば、支援をやめても自立した状態が続くと思う。

▶ 子どもの学力を上げていく。
▶ 仕事をつくればいいわけだから、日本の企業が進出してネパールの人を雇う。
▶ ゴミの処理の仕方や衛生環境の整備など、過ごしやすくするための支援をすればよい。
▶ 地震が多いのは同じなので、対策について教えると良いと思う。

② JICA 青年海外協力隊員の活動内容を紹介する。
・川喜田さん・・・農村でコミュニティ開発に関わっている。
・國友さん・・・学校現場で防災教育に尽力されている。

③ 世界文化遺産「カトマンズの谷」は 2003 年に、危機遺産に登録されていた。（その後 2007 年に解除）
この理由は、都市化が急速に進み、伝統的な建物の老朽化や建て替えなどで、古い町並みを守ることが困難になってきたからである。古い伝統的建築物が残る点では、奈良も共通している。
DVD 教材を視聴したのち、古い町並みにどのようなところに価値があるのか、考え、記述する。

ココがポイント
▶ 写真や動画を交えて具体的な活動内容を紹介する。
▶ 「顔の見える援助」「施しではなく、共に汗を流している」に気づかせる。

生徒の感想
▶ 失われつつある昔の建築技術など、今では使わない技術を後世に伝えていく役割があるので、建物には価値があると思います。
▶ 古い町並みがあることで、昔のことや文化、伝統が理解でき、どのような成り立ちで国ができたのかがわかる。
▶ 信仰がさかんなら、古い町並みの方が合っていると思う。

ココがポイント
▶ 景観保護のために、建て替えに関して規制が厳しくなったが、古い工法で修繕するとなると費用も莫大にかかり、結果的に手放して空き家になり、手つかずのまま朽ちていく家屋が増えている。
▶ バドガオンでは、外国人観光客からの入場チケット代を伝統的建物や宮殿の修復費にあてるという取り組みをしている事例がある。
▶ 地震後、世界遺産の復旧方法としては、セメントなどの人工物を使わず、レンガのつなぎ目に木材などの自然素材を活用することで耐震強度を高めているという工夫も行われているようである。

4. 成果

「見ようとしないと、見えてこない」「そこに住んでいてあたり前の風景だからこそ、気づいていないこと」「遠くの場所から来たからこそ、見えること」

今回のネパールの教師海外研修は、そのようなことを探し求める旅だったように思う。

「豊かさ」の物差し（尺度）は、必ずしも金銭的な価値観だけで測れるものではなく、日本は日本、ネパールはネパールで良いところも悪いところもあるのだろう。

最近、ネパールのアチュトさんとメールで連絡をとった際、「How are you?」の問いに対して、「I'm very busy.」と返答する自分がいた。アチュトさんは、「日本人は忙しいという話を知っています。」といった内容の返事を笑い話のように送り返してくれたが、人間らしい生活を送るという面においては、ネパールの方が豊かさで勝っているのかもしれない。

ネパールは１日１．２５ドル以下で暮らす人々の割合が国民の約４分の１を占める国だそうだ。

夢が夢で終わらぬよう、挑戦できるチャンスが平等に与えられたり、選択肢が多い世の中というのが本当の「豊かさ」なのかもしれない。

アチュトさんは日本へ留学する夢を抱いている。日本在住のネパール人の友人に聞いてみると、要はアチュトさんがどこまで本気の気持ちで勉強するかによって結果は変わってくるということだそうだ。

アチュトさんにとっても、私にとっても、学びはまだまだ始まったばかりである。

5. 課題

本研修においては、事前・事後で数回にわたって授業づくりに向けての検討の場を設けていただき、参加型の開発教育を推進できるよう、さまざまな手法について学ばせていただいた。

しかし、見聞してきたことが多すぎたため、授業化にあたっては、学習のねらいの軸を絞り込むことが思うようにできず、結果的に、授業中に生徒たちが混乱を招くような場面を、幾度となく痛感した。

国際理解教育にとって、何よりも現地を訪れることは「百聞は一見にしかず。」である。ただ、教育現場において、現地に行っていない生徒と開発途上国をつなぐことは容易ではない、つまり、授業をしながらギャップを感じる場面が数多くあった。どうしても、内容が表面的な薄っぺらい議論になったり、空回りしてしまうのである。

今回の授業では、できるだけ具体的な場面を設定したつもりではいたが、中学１年生段階では語句の説明だけでも理解が不十分なところもあり、抽象的な意見の交換にしかできなかった。

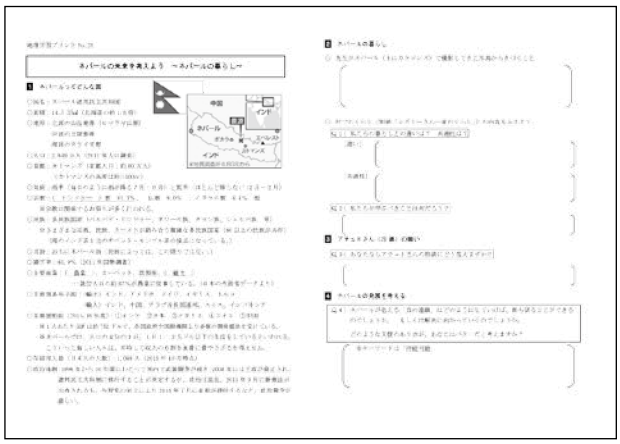
今後は、もう少し論点を明確にした上で、１枚の写真からその背景をさぐるなど、欲張りすぎずに着実に核心に迫っていけるような実践を重ねていきたいと思う。

このような機会を与えていただいた JICA 関係者の方がたに感謝するとともに、共に悩みぬいた同志の先生がたにお礼の言葉を述べたい。「デレ　デレ　ダンネバード！（ありがとうございました。）」

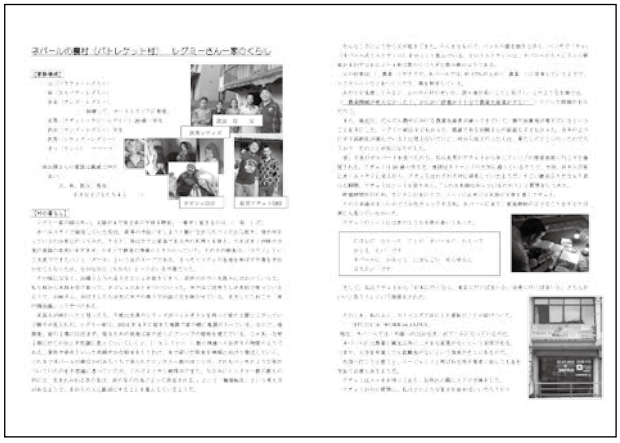
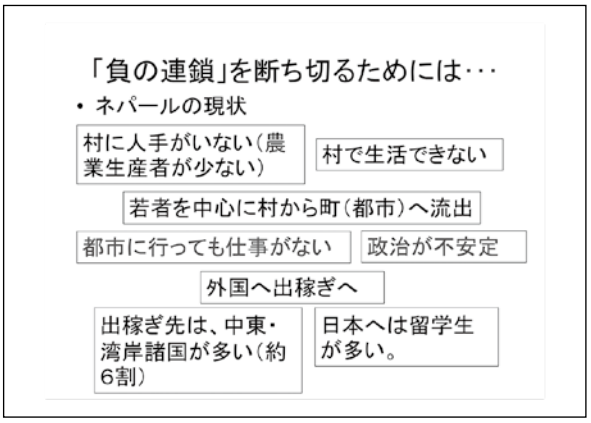
参考文献

・参考文献
「ワークショップ版　世界がもし 100 人の村だったら　第４版」開発教育協会　2014
「レヌカの学び　～自分の中の異文化に出会う～」土橋泰子　開発教育協会　2011
DVD ブック「危機にたつ世界遺産３４」小学館　2006
・参考ホームページ URL
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/（外務省ホームページ）
https://matome.naver.jp/odai/2141604166159924101（日本で急増するネパール人。その現状と背景とは？）

資料１



資料２



資料３